

「報いのクリスマス」

ルカの福音書 2 : 36 - 38

December.19.2021

おはようございます。 メリークリスマス！ メリークリスマス！ 主イエス様の御誕生を心から感謝し、お祝い申し上げます。

クリスマスの賛美を共に歌いましょう。

ルカの福音書 2 : 36 - 38

Preface

聖書に記されている主イエス様の誕生の記録を見ますと、社会的に地位の高い人から低い人、若者から年を重ねた者まで、男女の性別問わず、色々な立場や身分の人に告げられ、イエス様のご誕生に直接関わるよう神様が導かれたことが分かります。

東方の博士たちは学識もあり、富もあつた人たちだったでしょう。

ヘロデ王は、そのものずばり富と権力の象徴である王でした。

一方、主イエス様の父親となったヨセフは、しがない一大工でした。

マリアがヨセフのいいなずけとなり、聖霊によってイエス様を身ごもった年齢は14歳ぐらいだったのではないだろうかと言われ、今ならまだ社会経験も人生経験も浅い少女です。

数多くの大国に飲み込まれるような波乱の歴史を刻み、ローマ帝国の属国となっていた小国イスラエルの祭司として、それでもなお健気に、主の命令と掟を落ち度なく行っていたザカリヤ&エリサベツ夫妻。

社会の最下層の労働者として夜番をしていた羊飼いたち。

また長年、旧約聖書の約束通りメシアがお生まれになるということ待ち望み、実際にお生まれになった赤ん坊のイエス様を見るや否や、聖霊に導かれて、貧しい夫婦の懷に抱かれた非力な赤ん坊イエス様が約束のメシアだということを見抜き、その腕に抱き、「私の目が神の御救いを見ました」と告白しながら賛美を献げたシメオンという一介の一市民。

そして、先程、お読みしました女預言者アンナです。

Part One

ルカの福音書ほど、イエス様の誕生の様子を詳細に記している書物はありません。

ルカは、救い主イエス様の御降誕に関わった多くの登場人物について記し、し

かも、その登場人物たちは他の福音書などには出て来ない人たちがほとんどです。

例に漏れず、アンナもルカの福音書にしか出てきません。

イエス様の誕生を記録するにあたって、女預言者アンナと赤ん坊イエス様の出会いを記したルカには、アンナのことを記さなければならなかった意図があったはずです。

他にも赤ん坊イエス様と出会った人々はいたはずですが、アンナのことを必ずや記録に残さなければならなかった理由と聖霊なる神様の導きと意図は何だったのか？

その理由を考えながら聖書を読みますと、その理由が、ルカの記したアンナの特徴に良く表れていることが見えてきます。

アンナの特徴を一言で言いますと、「不憫な信仰者」と言えるかもしれません。

不憫で、哀れで、万軍の主を信じる信仰者として歩んではいたものの、当時の社会的背景のみならず、現在の社会的背景に照らし合わせても、人々から「アンナのようにになりたい」と思えるようなものは何一つなかった不遇の人のように見えます。

もちろん、シメオンやザカリヤやエリサベツのように、霊的な目が開かれた信仰者からすれば、「アンナのような信仰者になりたい」、「アンナのように神様を信頼しながら歩みたい」という、異邦人クリスチャンであったルカの目にも止まるほどですから、信仰者としての尊敬の念は抱かれていたと思いますが、世間一般的には、誇れるようなもの何一つ持っていない女性でした。

でも、これは私の勝手な想像ですが、白髪で、凜とした、物事を見透かすような透き通った目の輝きを持ち、人の目をしっかりと見つめながら話し、笑った時には包み込まれるような雰囲気を持つ、人として美しいダニエルのような、モーセのような、ヨセフのような、または乙女マリアのような信仰者が憧れるかっこいい女性だったのではないだろうか、そしてそのすべての品性が主を信頼し寄り頼んでいることから滲み出てくるような霊的麗しさを持った人だったのではないだろうかと思えます。

社会的には、憧れるようなもの何一つ持ち合わせてはいないけれども、霊的に美しいものをその人生において主が錬ってくださった人だと思えます。

ルカが、たった3節ですけれども、記録せずにはいられない人、それがアンナでした。

もう一度、36、37節を読んでみます。

ルカの福音書 2 : 36 - 37 (パワポ)

アンナという人がどういう人であったのかについて記しているこの箇所は、読みようによっては、当時の社会的背景のみならず、仏教や神道以外の宗教には少し強めの心理的抵抗を示す現代日本においても、この36, 37節に表れるアンナはその人生の不遇さから、ちょっといかがわしい宗教にどっぷりハマった不憫な女性にも見えるかもしれません。

何よりも不憫に思えるのが、「処女の時代の後、七年間夫とともに暮らしたが、やもめとなり、84歳になっていた」という記述ではないでしょうか。

ルカは、これに加えて、「この人は非常に年を取っていた」という修飾語まで付けて、もちろん長年敬虔な信仰者として歩んできたという尊敬の念も投影させている表現なのでしょうが、「アンナのその社会的な不憫さを読者に伝えようとしているのかなあ」とも感じます。

処女の時代というのは、先ほどお話ししましたように、当時の女性たちはマリアのようにとても若い時代に結婚したようなので、例えば15歳で結婚をし、7年間だけ夫とともに暮らしたとすれば、22歳から84歳まで、実に64年間もの間未亡人として暮らしてきたということになります。

彼女が、主の宮を離れず、断食と祈りをもって、夜も昼も神に仕えるほどの信仰者として歩んだのが、結婚前からなのか、もしくは結婚後なのか、または、夫を亡くしてからなのか、この記述だけでははっきりとはわかりませんが、「宮を離れない」という物理的な献身生活は、少なくともやもめになってからだと考えられます。

また、ただの祈りではなく、断食と祈りをセットにして祈る祈りを日常のようにしていたということからも、ここまで熱心な信仰者として神の言葉を伝える預言者として歩むようになったのは、夫を亡くしてからの事ではないだろうかと思えます。

「主の宮を離れずに、夜も昼も神に仕える」という生活は、家庭のある当時の女性にとっては、やはり少し難しいのではないかと思います。

聖書に出てくる断食は、いわゆる特定の宗教を信奉する者たちが、悟りや鍛錬修行のために行う宗教儀式ではなく、

言葉にならないような呻き、苦しみ、痛み、困難を、肉体の命を保つための食を断って、まさに命がけで神様に自分の置かれた境遇を、また内なる悲痛を神様に訴えながら、神との関係を今こそ深めたいという時にするのが断食です。

こんな断食を常日頃からしていたアンナには、やはり、私たちの想像を絶する

ような苦しみや痛みや辛さがあり、その境遇の中を64年間もの間生きてきたということが想像できます。

今とは比較にならない程の家父長制度の強い男性社会にあって、若くして夫を亡くし子もいない、将来や未来の人生設計を見通すことが全く出来ない、まさしく暗闇のような、死の影の谷のようなところに突如として突き落とされた、当然ながら痛切に感じたことでしょう。

そんな不運に見舞われたアンナがすがったのは、他の新たな男性でもなく、条件の良さげな働き口でもなく、愛なる神様だったのだらうと想像します。

苦難をもって神はいないとはせず、苦難ゆえに、または苦難のうちに私たちの想像を遥かに超えたご計画を持っておられる神様に、断食と祈りをもって迫って行ったのではないだらうかと思うのです。

そして、苦難のうちに共にいてくださる神様を知り、体験し、苦難を通っている者にだけ語れる神の言葉をいただき、男一色の預言者業界の中に割って入る女預言者として、聖書の言葉の奥深さを悟らされ、同じく苦難のうちにいる多くの人々の力となる言葉を、慰めとなる言葉を、希望となる言葉を聖書から語る女預言者としての歩みを与えられていったのでしょ

う。ヘブル書を見ますと(ヘブル4:15-16)、「私たちの大祭司イエスは、私たちの弱さに同情できない方ではなく、罪は犯しませんでした、すべての点において私たちと同じように試みにあわれました。

だから私たちは、あわれみ受け、また恵みをいただいて、折にかなった助けを受けるために、大胆に恵みの御座に近づこうではありませんか」という御言葉があります、

あわれみと恵みと助けが必要な弱き存在である人々に、痛みを知れる神の言葉の語り手として、アンナは立てられていったのでしょ

Part Three

皆さんは、万軍の主、王の王、主の主、天地万物をお造りになった神であられるイエス・キリストが、なにゆえに、人間の赤ん坊というあり得ない程に弱い存在としてお生まれになったのだらうかと、真剣に悩んだことがお有りでしょうか？

何もそんな一見すると分かりにくいお姿で来るのではなく、じゃじゃ~んと誰が見ても王の王、主の主としていらっしやればいいのに何でそうしなかったのか？

イエス様が、聖霊によって身ごもったマリアの胎内から赤ん坊として生まれ

たということをクリスチャンとしてあまりにも当たり前が出来事として捉えていた時には、私自身もこんな疑問を持つことが出来ませんでした。

「全知全能な神なんだから、私たち罪人とは違った超自然的な生まれ方を当然のようにされなければならない」と杓子定規に思っていました。

でも、自分の弱さを骨身に染みるという言葉がこの年で言うと生意気に聞こえるかもしれませんが、自分の弱さを痛いくらいに感じた時に、「なぜ、イエス様は、非力で、これ以上ない弱いお姿をもってお生まれなされたんだろうか？」という疑問が湧いてきました。

そして、その疑問を解くために聖書を祈るような気持ちで読み進めて行きますと、それまでよく口にし、説教もし、何度も説教の中で引用してきた聖書箇所が、全くもって新しい意味合いを持つ言葉として迫って来ました。

コリント人への手紙第二 12 : 10 (パウロ)

キリストは、神としての力を誇示するためにお生まれになったのではなく、「弱くていいんだよ。強くなる必要なんかないんだよ」ということを身を挺して教え、示してくださるために、非力な赤ん坊としてお生まれなされたということに気付かされてしまいました。

人間の根本的な問題は、「強くない」ということではなく、「弱い」ということを認められないことにあるというのが分かってしまいました。

唯一強いお方は「神」のみであり、神の強さを認め、人の弱さを実感し告白できることに幸いがあり、いのちがあり、回復があり、道がある。

でも、私たち人は、生まれたその瞬間から知的に、肉体的に、精神的に強くならなければならないと、強くなることに道があるんだと、強くなることに勝利があるんだと教えられ、強さを身に付けようと躍起になって競争し、負かし、見下し、踏みつけ、見掛け倒しの自分の強さを誇り、

遂には、神の強さを忘れ、無きものにし、本当は不安でガタガタ震えている弱い存在なのに、その弱さを見せることも出来なければ、認めることも出来ない。

弱さを忘れた存在になっていることが、人間の抱える問題の根本だということを、この第二コリントの言葉から、またイエス様が非力な赤ん坊でお生まれなされたそのお姿から、教えられました。

使徒パウロは、人として誰も経験したいとは思わないような労苦や痛みを経験しながら、自らの弱さを骨身に染みるほどに知り、そして、キリストのゆえに弱い時こそ、強いのですという命の本質を実感として教えられていきました。

赤ん坊としてお生まれなされたイエス様のように、父なる神の前にあって、自らの弱さをさらけ出せることに命があるんだと、生きた心地がするんだということを知りました。

このことを身をもって知るために、なおも自分の強さを誇ろうとする頑固さをことごとく打ち崩すために、労苦や痛みがあることを悟らされていきました。

コリント人への手紙第二 11 : 23 - 30 (パウロ)

弱さを排斥していた者から、キリストのゆえに弱さを誇る者へと、パウロは変えられていきました。

Part Four

神様は、アンナを愛しておられました。

表面的な愛ではありません。

とてもとても深い愛で、愛しておられました。

衣食住が満たされ、家族円満で、万事順調にいく中で感じる薄っぺらい愛ではなく、キリストのゆえに弱い時にこそ強いという愛を、苦難の64年をかけて教え、示し続け、

そしてアンナ自らも、弱さのうちにあらわれるキリストゆえに強いという愛を悟り、喜び、その歩んできた人生が、非力で弱々しい赤ん坊でお生まれになったキリスト・イエスに出会い、「こんな神じゃない！　こんなメシアじゃない！」と思う代わりに、「これこそ最も、愛なる神様らしいあらわれ方だ！」と心底思い、赤ん坊のイエス様を懐に抱き、人生が報われました。

アンナのためにご計画されていた神の御手が有ることを、64年間、なおもある断食と祈りをせずにはいられない苦難の中で、日々少しずつ、少しずつ実感していくような人生を歩んできて、弱々しい非力なお姿でお生まれなされたメシアに出会い、報われました。

父なる神の前にあって、安心して弱さを認めさらけ出せることの出来る幸いこそ、まことの幸いなんだと実感できました。

「ああ、私の人生間違っていなかった！　ああ、私の人生そのすべてが、主の手の内にあったんだ！　ああ、私の人生、すべてを失った人生だったけれども、人が人として得なければならぬ神がお与えくださる大切なものはすべて手に入れていた人生だった！　なんて嬉しいんだ！　なんて喜ばしいんだ！　私の人生に比類なき大きな恵みが来た！」と、アンナは喜べました。

神様の深い深いご愛と配慮と導きがありました。

神様の深い深いご愛と配慮と導きのあらわれである赤ん坊イエス様に出会い、

アンナは何もかもが報われました。

神様は、私たちを裕福にすることを目的としていません。

もちろん、裕福も、人を愛し神を愛すために、手段としてお与えになることもあるでしょう。

でも、目的ではありません。

「貧しい者は幸いです。今飢えている人たちは幸いです。今泣いている人たちは幸いです。人々が、イエス・キリストゆえに憎み、排除し、ののしり、けなす時、あなた方は幸いです」という幸いを、幸いだと思える者へと変えていくことが、神様の私たちの人生における目的であり、ご計画です。

Part Five

今、早天祈祷会でヨブ記を学んでおりますが、その中でヨブを責め立てる3人の友人たちが、神を信じることと苦難とは無縁だと訴えます。

ヨブが経験している苦しみや痛みは、無意味なもので、神様をまともに信じることが出来ていないから被っている害だと、ヨブのことを責め立てます。

それに対して、彼ら3人の友人たちよりもはるかに若いエリフという人が声を上げます。

「あなたたちは私よりも人生を長く生きているかもしれないが、あなたたちのヨブに投げかける言葉は全くもって見当違いだ！

神様はヨブを見捨ててはいないし、意味のない苦しみを課しているわけではない！

そこには、私たち土で形造られた人間の意思や思いを遥かに超えた神のご計画があるのだ！

神は、痛みをもって人を責め、いつまでも続くような骨の病によってお叱りになる方だけけれども、苦しめることを目的としているのではなく、苦しんでいる当人にとって最善の御旨を成し、必ずや、人のたましいを滅びの穴から引き戻し、いのちの光で照らされる！

だから、あなたがたは、神を待て！」と言います。

苦難には神の意図があり、その意図の中で生かされていることを信じ続けることの重要性を訴えます。

『神なんかいない！ 神なんかいるはずがない！ 神がいたらこんなことが起こるはずもなければ、こんな苦しみが私に降りかかるはずがない！』と言ってもいいし、思ってもいいから、でもそんな時こそ、なおさら、神を待て！」とエリフは言います。

「神がいないと言ってしまう程の苦しみにあるその訴えは、神の御前に届けられているから、その訴えに必ず答えてくださる神を待ち望むことだけは、忘れて

はいけない！」とエリフは言います。

事実、ヨブの苦しみ苦難には、誰も想像できないような回復と報いと計画と神の意図がありました。

神様はヨブの苦しみを通してサタンを蹴散らただけでなく、身を裂かれる苦しみを通っているヨブを責め立てた罪ゆえに神の怒りを被った3人の友人たちのために、ヨブが仲保者として立ち、友人たちを神の前に執り成した姿を通して、後にお生まれになるイエス・キリストを予型するという大仕事を成し遂げました。

Conclusion

私にとって今、最も苦しくて、嫌で嫌で仕方がないのが、説教準備です。特に、主日礼拝の説教準備です。毎回、身も心もボロボロになるような気がします。正直、苦痛です。

なぜならば、長時間、神様と格闘しなければならないからです。神様と格闘なんか出来るわけないのに、格闘します。ただその前に跪いて、「負けました。勝てません。あなたは強いです」と言えばいいのに、それが嫌で、神様に格闘を仕掛けます。

もっと言いますと、私の内にあるマグマのような罪深い罪が、神様に戦いを仕掛けずにはられません。負けを認めたくもなければ、自分の弱さを認めることも嫌だからです。でも、その格闘の結果は、毎日負けです。百発百中、負けます。

でもまた、毎週、負けん気が出て来て、神様にガチンコでぶち当たっていきま
す。イエス様の、神様のすごいところは、ぶち当たって行く私の突進なんか幾らでもひらりとかわすことがお出来になるのに、どこまでも真っ正面で受け止めてくださいます。そして、私を負かしてくださり、私自身の弱さを（弱い羊であることを）認めさせてくださいます。

預言者アンナは、私なんかとは比較にならない程に、断食と祈りをもって、神様にガチンコでぶち当たっていき、対話を重ね、夜も昼も神様に仕え、神との関係が深められていったのでしょ
う。だから、世間一般の人の目から見たら、貧しい夫婦の懷に抱かれた、ただの非力な赤ん坊に、神様の御手を、神の救いを、神の約束の成就を見たのだと思いま
す。

小さな小さな出来事に、大きな大きなこれ以上ない大きな神のご計画の成就を、そこに見る恵みに与りました。

このクリスマスの時、私たち一人一人の歩みのうちに、神の御手が有り、ご計画があり、救いの完成が約束されている道程にあることを覚えたい。また、イエス・キリストこそ私たちの最大の唯一の報いであることを、アンナのように覚えられたらと願います。

主イエス様は、今も変わらず、インマヌエルの神として、私たちと共にしてくださっています。

この事実を心に刻んでいきましょう。

お祈りいたします。

祝祷：ヨブ記 36：14b